

を踏まえ前期難波宮への具体的な影響を考察する。李陽浩「古代東アジアにおける八角形建物とその平面形態」は、依然定説を見ない前期難波宮八角殿の性格を、東アジアの類例を挙げて再検討している。

以上、考古・文献・建築・思想など、古代難波宮研究に関わる諸分野について、現状での到達点を簡潔に示したことが本書の功績であろう。巻末に調査・保存略年表や関連調査報告書・主要図書一覧など、豊富な関連情報を掲げる点も有益である。単一分野の視点のみから難波宮の全容に迫ることの限界は自明であり、横断的・学際的視点が今後一層求められることは間違いない。本書は難波宮研究に携わる者に限らず、広範な人々に資する内容であり、今後の難波宮研究において常に参照すべき一冊といえる。

(A5判 三六八頁 二〇一四年八月
吉川弘文館 税別二二〇〇円)
(寺井康矩 京都大学大学院文学研究科修士課程)

Glenn Dynner,

Yanbel's Tavern:

*Jews, Liquor, and Life in the Kingdom
of Poland*

アダム・ミツキエヴィチといえばポーランド・ロマン主義を代表する詩人であるが、その彼が亡命先のパリで執筆した作品『パン・タデウシユ』をご存じだろうか。舞台は一九世紀初頭のリトアニア。ナポレオンの東方進軍によって待望の故国復活なるかという熱気のなか、主人公であるタデウシユとその周囲の人物たちが織りなした社交、陰謀、対立、和解の物語である。

その作中、中心的というわけではないけれども、個性的かつ魅力的な人物として、ヤンキェルというユダヤ人の居酒屋店主が登場する。彼の店は地元のシユラフタ、農奴、司祭らがやってきては大いに酒を飲む社交の場であった。ひとり店主ヤンキェルだけが素面を保って店内を見張り、ときに楽器を手にして客をもっと楽しませる（飲ませる）のである。かつてかの地でこうした情景はありふれたものだった。分割はそ

の日常を変容させたのだが、あの伝統的な世界は一体いつまで存続したのだろうか。

ここに紹介するグレン・ディンネルの近著『ヤンキェルの居酒屋』は、ポーランド王国（ロシアに分割された領域のうち、今日のウクライナ、リトアニア、ベラルーシを除いた地域）を対象にこの問いに答えるものである。以下ではその要点を二つにまとめる。

一点目は、史料読解に依拠する実証主義批判である。従来説では、分割後の国家によるユダヤ人居酒屋の規制（例えば、許可制の導入、店舗の主要街道からの隔離）が、その衰退をもたらしたとされてきた。だがこの学説は、取り締まる公権力にとつて都合の良い事実のみを述べる史料の性質を看過している。

近世以来、ユダヤ人はシユラフタから居酒屋を貸付され、そこから生まれる利益は所領の主な収入源をなした。そしてそのような経済構造のもとでは、居酒屋を成功させるには常に素面を保つユダヤ人こそが最適であるという観念が形成された。上述のヤンキェルは、詩人自身がなじんでいた当時のユダヤ人イメージの表象であったのだ。

こうした観念を修正することなく実施された国家の規制は、意図せずして「地下経済 black market」の成立を導くことになった。つまり、当時の裁判記録で確認された、店頭での酒類販売自体はあくまでキリスト教徒が務める「隠れユダヤ人居酒屋」の横行である。地主のみならず、密売人（これもしばしばユダヤ人）が運んだ手工業品やタバコ、砂糖などを買う農奴からも、隠れユダヤ人居酒屋は大変重宝された商業施設だったのである。

このようにユダヤ人居酒屋は、分割後も封建的地域共同体のなかで存続していた。ここから考えられるのは、農奴解放による封建的諸関係の解消がもったであらう衝撃である。実際、先行研究はポーランド王国において農奴解放がなされた一八六四年を境に、ユダヤ人居酒屋が激減したとしてきた。

だが筆者は、YIVO ユダヤ学研究所にあるグートマツヒヤー・コレクションを基に、右記の従来説に反論する。同コレクションは、プロイセンのラビだったエリヤ・グートマツヒヤーに、一八七〇年代初頭まで届けられた生活相談書で構成される。その統

計的分析からは、ポーランド王国のユダヤ人が酒類販売に携わる割合は農奴解放前と比べて低くはなかったことが明らかにになった。

本書の二つ目の特徴は、これらの生活相談書が丁寧に読み解かれるなかで、読者がユダヤ人民衆の語りに触れられるところにある。酒と賭博に耽る夫との離婚を望む人妻や、商売上の悩みを抱える居酒屋店主など、どれもつい立ち止まって読み込んでしまう魅力をもつ。だがとりわけ、自ら密輸に手を染めていることを告白し、他に良い仕事があれば足を洗いたいと述べる現役密売人（―）の声は示唆に富んでいた。彼にとって酒類販売に関わることは、危険が伴うものであっても有力な稼ぐ手段であったのだ。

本書の結論では、以上のような「ヤンキエルの居酒屋」の世界は、工業化のもとでさらに社会変容が進展した一九世紀末まで続いたとされる。居酒屋という場所から、近代的資本主義の論理がいかに伝統的な経済社会に接合されたのかを考えても面白そうだ。と、このように本書は、居酒屋論を通じて私たちの歴史的想像力をかきたてて

くれる。民衆歌や図像の利用も多く、文学や人類学に関心のある読者も満足の一冊だと確信する。

(230×163 mm, pp. xi + 249, December

2013, Oxford University Press, \$74.00)

(福元健之 京都大学大学院文学研究科博士後期課程・

日本学術振興会特別研究員)

受 贈 誌

(二〇一五年七月二日)

二〇一五年九月三〇日)

三康文化研究所年報 (三康文化研究所) 四六

立命館法学 (立命館大学法学会) 三五九

RITSUMEIKAN LAW REVIEW (The

Ritsumeikan University Law

Association) 三三

韓國史研究叢報 (韓國国史編纂委員会) 一

六八・一六九

大美和 (大神神社社務所) 一二九

経済科学 (名古屋大学大学院経済学研究

科) 六三一

東北文化資料叢書 (東北大学大学院文学研

究科東北文化研究室) 八